

居るからである、これによると原本は二十卷で、一々の語は天文、時令、地輿といふ様な類の下に集録したもので全體で二百八十類に及んだものである。

次に有名なる乾隆の時代となつては、清文鑑の増訂は、實に頻々として行はれて書物の歴史の上に一つの珍らしい例を残して居る。先づ第一に舉ぐべきものは蒙古清文鑑と稱するもので、皇朝通志にも此の書名は見えて居るが何年になつて出來たかは記して居ない、しかし其の序文は乾隆八年に作られて居るから、思ふに此の年書成つて刊行したものであらう、これは前の清文鑑の滿洲語に蒙古語を對せしめたものである。

第一には清文鑑としては最も廣く行はれ、我が國徳川時代の滿洲語學者なども盛に利用した所の「御製增訂清文鑑」なるものが出來た、これは乾隆三十六年になつて出來たものであるが、もとの清文鑑或は音漢清文鑑などと比較して見ると、字書として甚だ改善せられたものである、其の體裁は左に滿洲語を書き、之と並べて、右に對應の漢語を書き、滿洲語の左には、漢字で其の發音を示し、同様に漢語には其の右に滿洲語で發音を記したものである、それで滿漢何れかの文字言語を知つてさへ居れば、此の書を用ひて他の一方を知ることが出来るのであつて、手數のかゝつた丈けに、甚だ便利の書物といはなければならぬ、四庫全書總目提要にも、此の點を賞讃して「伏而讀之、因漢文可以通國書、可以通漢文、形聲訓詁、無所不具、亦可云包羅巨細、辯別精微者矣」といふて居る、而して増訂の程度は之に止まらないで、其の新增の語の數も序文に因ると「綜計續入新定國語五千餘句」と見えて居る、從がつて卷數も増加して三十二卷となり、別に補篇四卷を加へ、又た總綱八卷、補總綱二卷が附けられてある、補篇と